
「アースルーリンドの騎士」外伝 『確かなもの』

天野音色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「アースルーリンドの騎士」外伝 『確かなもの』

【Nコード】

N9022F

【作者名】

天野音色

【あらすじ】

ギュンターは旅先で、実の父に出会う……。男ばかりの兄弟と逞しい母と父を持つ彼の実の母は、現母の、妹で、彼の実父との恋に破れ、産んだばかりの彼を残し、自殺同然でこの世を、去っていた。実父は彼の存在を知らず、彼と偶然出会って驚く。ギュンターは名乗る気すら無く、話しかける実父を受け流そうとしたが男はそうしなかった。ギュンターを自宅……。妻と子の居る居城に、旅の同行者、叔父と共に招いたのだ……。

ギョントアの生い立ち（前書き）

途中です・・・。

続きはいつになるか、解りません。

時間が、欲しい！

ギョンターの生い立ち

ギョンターは思い出していた。

自分だけが兄弟の中で唯一人金髪で、顔立ちも彼らと違っていた。それに気づくと彼の母親は毎度、彼を抱きしめてささやく。

「お前は私の子。それだけは決して忘れては、駄目。

誰が何と言おうとね」

親父はそれを見て、その通りだと、何かに立ち向かうように、その逞しい背中を見せた。

だが自分と同様、父にも兄弟が沢山居て、その一人の叔父に教えられた。

本当の母は今の母の妹で、その相手は大層美貌の金髪の男。だが彼は遊び人で、結局大貴族の娘と婚約したと。

今は西領地「シャノスゲイン」の都よりも奥方と住んでいて、……つまり彼の母親が彼を産んだ事すら、知らない。

彼の実母は……彼を産んだ後、結局……川に身を投げ、自殺同然で亡くなったと。

妹の死を痛み、だから……彼の母親は彼を自分の子として育てようと決めた。と……。

旅に出た際、ふとした事で父と出会った。

酒場で、酒を買う使いに出され、注文した酒やハムが出て来るのを待ってる時ふいに……腕を掴まれて引かれ、振り向いたその先に自分と良く似た顔が、あった。

その顔はうんと大人で驚愕に……目を見開いていたが……。

目の色こそ、違ったが、鼻筋、顎、頬……とても似ていた。

金髪も。

「……母の名は？」

男はいきなり、聞いてきた。

彼は直感で父親だと、解った。

「アレステン・・・あんたと縁は無い筈だ」
だが男は頷いた。

「ミラーリの姉の名だ」

ギウンターは顔を、揺らした。

男も確信していた。彼を自分の子だと。

それを・・・認める気か？せつかくしらばっくれてやったのに・・・！

だがギウンターは聞きたかった。

「ミラーリを、覚えているのか？」

男は頷いた。

「昔俺が付き合ってた女の、一人だ」
ギウンターが言った。

「だがあんたが結婚したのは別の女だ」

男は、頷いた。その美貌が、ひどく静かで感情を殺しているんだと、解った。

「・・・そうだ・・・。だが様子がおかしいのは、解っていた。それで・・・」

男はため息を、付いた。

「俺の居所をどうせ知ってるんだろう？」

息子だと、名乗りに来たのか？」

ギウンターは同様に感情を殺す自分を感じた。

低く、つぶやく。

「たまたま、通りかかったただけだ！あんたの事なんて知るもんか！

俺にはちゃんと両親が、居る！」

どうしても・・・殺しきれなかったが。

男は一つ、ため息を付いた。

「・・・顔が柔だと、男共に馬鹿にされるか？」

ギウンターは顔を、揺らした。

「・・・大人しく馬鹿にさせたりしない」

男はまた、頷いた。

「どこに泊まってる」

「・・・宿がいっぱい今夜は野宿だ。酒と食事を買いに来た」

男は聞いた。

「誰と一緒にだ？」

「叔父だ」

男は彼の肩に腕を回し、顔を戸口に向けて言った。

「案内しろ」

肩を強引に引かれ、ギュンターが怒鳴った。

「酒と食事がまだだ！」

男は彼を見下ろして、言った。

「・・・もつといいものをちゃんと、振る舞う」

ギュンターは目を、見開いた。男は彼の肩を強引に戸口へと押し進む。

「・・・自分の屋敷に・・・？本気で？妻と子が、居るんだろう？言いたかったが、男は無言で彼を、連れの叔父の元迄引き立てた。

屋敷に、子供は二人居た。

二人共が男の子で、一人は母親似でギュンターより年上に見え、一人は幼かった。

奥方は彼を見、一瞬身を、震わせた。

「食事と・・・酒を頼む」

男が言うと、彼女は頷いた。そして召使いに指図する。

彼女の後ろでその子供達は彼をじっと、見つめていた。

叔父は帽子を取り、男は尚も言った。

「今夜は宿が無いそうだ。客室を用意してくれ」

彼女はまた、頷いた。

黒に近い栗毛と青の瞳の、美人とはいいがたかったが、気品があり・・・芯の強そうな、そしてどこか優しそうな女性だった。

食事の席で、皆が押し黙った。

だが男は叔父に訊ねた。

「俺を訊ねる気じゃなかったのか？」

明るい栗色の巻き毛で・・・男よりは若造には見える叔父はだが、その空色の瞳に何の感情も浮かべず、素っ気なく言った。

「こいつにはちゃんと、両親が居るからな。そういう心配はご無用だ」

そして、喉越しの素晴らしい名酒のグラスを手にとると、美味しい酒に舌鼓を打つ。

叔父の言葉は、どちらかと言えば奥方に聞かせる為の言葉だと、ギウンターには解っていた。

そしてギウンターはもう一人・・・ほっとした様子を見せる、彼女の二人の子供の内の、幼い方の男の子を、見た。

彼は慌てて、ギウンターの視線に気づき、俯いた。まるで・・・父親そっくりの彼を凝視出来ないように。

だが、男は顔を揺らしてつぶやいた。

「・・・ミラーリは結婚したのか？母の名を聞いたら、アレステンだと言ったぞ」

叔父はギウンターをそっくり大人にしたような、優美に整いきったその美男の顔を、たっぷり見た。

「・・・ミラーリは死んだ。アレステンは妹の言葉通り、こいつを自分の子にした。今はもう、アレステンの息子だ」

男が動揺して顔を揺らすのを、ギウンターは見た。

「・・・どうして死んだ」声が、掠れていた。

叔父は首をすくめた。

「川で足を滑らせてな・・・まあ・・・事故だろう？」
だが男はつぶやいた。

「本当に、事故か？」

叔父はその時の事を思い出すようにつぶやいた。

「あれは、事故だ・・・」

だが彼女はその頃、マトモじゃなかったから・・・川で無く丘でも、

足を滑らせたかもな・・・」

奥方が青冷めてささやいた。

「・・・それは身投げと、言うんじゃないくて？」

叔父は顔を下げ、男と奥方にギョンターを気遣えと、視線を送った。二人はそれに、気づく。

ギョンターは叔父を、見た。だが叔父は、折角の機会だから、親父をちゃんと納得行く迄観察してやれ。と彼を見つめた。

ギョンターはつい、俯いてため息を、吐き出した。

食後酒を配る居間で、男と叔父は差し向かえで飲んで居た。

子供達はミルクにハチミツが入った暖かい飲み物を振る舞われた。

男が、つぶやいた。

「・・・子が出来た時点でどうして・・・俺の所へ来なかった？」

叔父はさあな。と顔を上げ、

「あんたとつくに、奥方が居たろう？」

「・・・それでもだ！言いに来るのが普通だろう？」

叔父は俯き・・・ささやいた。

「アレステンが言うには・・・夢見がちな娘で・・・あんたが自分のものに成ると、・・・そんな夢を見ていた。

だから現実は耐えられなかったんだろうと。

折角・・・授かったのにな・・・あんたそっくりの・・・。

だが子供はあんたの代わりに成れなかった」

側に居た二人の子供はギョンターを見、ギョンターは俯いてため息を吐いた。

男はそつと・・・ギョンターを見つめた。

「・・・それでも言いに来るべきだろう？」

「言って、どうする？養育費を貰い・・・愛人に成るか？」

叔父が笑い、男は顔を揺らした。そして肩をすくめる。

「チェンルースの母親くらい肝が座っていたら・・・」

二人の子供の幼い方が顔を、上げた。

「子供を俺に引き取らせて再婚出来た」

ギョンターはつい、そのチェンルースと呼ばれた幼い男の子を、見た。

確かに・・・男とは全然似た所が一つも無い子供だ。

母親が再婚するのに彼が邪魔で男の子供だと言い張り、男に預けた
としか、考えられない顔立ちだ。

それで・・・彼はびくびくしているようだった。

男が、自分の子と確証の無い彼より、自分そっくりのギョンターを
気に止めるのが、不安なように。

男は眉間に指を当て、俯いた。参ってる様子だった。

ギョンターがつい、ぼそりと言った。

「・・・なんだ・・・顔のいい遊び人の割には、無責任じゃ、無い
んだな」

叔父が彼の言いように知らん顔をした。

男はギョンターを見つめた。

「・・・そういう遊び人は最悪だろう？だが甘い顔をすれば女に舐
められるぞ。本当に、誠実な女も居れば、したたかなのも居るから
な」

ギョンターは頷いた。

「遊び人だけあって、詳しいな」

室内の皆はギョンターの言葉にぎょっとしたが、男は息を吸って言
った。

「・・・遊ばない男は最悪だ。情事はヘタだし、いい女の見分けも
つかないから、変に自惚れだけ強い役立たずのロクで無しだ」

ギョンターはだが男の自分そっくりの美貌を見つめた。

その瞳は自分と違い、綺麗な青だったが。

「・・・だがあんたはヘマしたんだろう？

チェンルースと俺の時に」

男は鼻に指を当て、ギョンターをじっと、見た。

「・・・ヘマした記憶はお前の時だけだ・・・」

第一・・・俺は避けるつもりだった」

「・・・ミラーリが離さなかったんだな？」

叔父が言い、男は顔を背けてつぶやいた。

「上に乗られちゃな・・・。引き離そうとしたが、遅かった」

ギウンターが言った。

「だがあんたは彼女のその後を確認する間無く結婚を決めた訳だ」
男はとうとう怒鳴った。

「彼女とそう成った時、結婚は決まっていた！」

ギウンターは男を、見た。

ひどい仕打ちをされたように、傷ついているのがその時ようやく、
感じられて。

「・・・引き返せた！ミラーリがそれを俺に告げていたら・・・！
だから聞きたかった！どうして・・・言いに来なかったのかと！」

「・・・でも彼女はとつくに知っていたわ・・・。

貴方の気持ちが自分に無い事を・・・。

愛されて無くて子供で貴方を縛るなんて・・・女にとっては惨めこ
の上無いわ」

奥方に言われ、男は横を、向いた。

そしてゆっくり、崩れ落ちるように頭を、抱えた。

叔父がそれを見て、ギウンターに微笑んだ。

「良かったな。いい加減な男じゃ、無くて」

ギウンターは肩をすくめた。

「・・・思ったよりずっと情があって、びっくりしてる」

男は顔を上げた。だが言葉を発したのは、奥方だった。

「・・・そう思ったら、もう少し言葉を控えてあげて」

ギウンターはそう言う女性のまろやかさに、つい喉を詰まらせたが
男は、吐き捨てるようにつぶやいた。

「無理だろう・・・。

顔だけで無く口のきき方も俺そっくりだ・・・！」
ギウンターは目だけ見開いて、男を見た。

確かに・・・それは感じた。性格も似てると。

どこか・・・呼吸とか、間とか・・・感情の出し方が。ギョンターは俯いた。

「加減しようにも・・・俺はこの男の事を知らない」

父親そっくりの顔の彼がそう言うのを、子供達はい、じっと見つめていた。

奥方は言いたいようだった。

『でも貴方の、父親なのよ』

だが男は頷くように顔を揺らした。

「確かに、そうだろうな」

その理解こそが、父親の証しのようにギョンターは感じた。彼は自分の思考が理解、出来てる。

だからどれだけ無礼な事を言ってもちゃんと・・・返答してくれるんだと。

ギョンターがつい、訊ねた。

「あんた俺に父親だと・・・慕わりたいのか？」

男は顔を、上げた。

「・・・俺の身にも、成って見ろ！

いきなりそっくりの顔の子供が、振って沸いて出てきたんだぞ！
考えてる間なんか、あるか？」

「ただ、ただびっくりか？」

「口をきかせても、俺そっくりだ。

遠慮の欠片も、無い！」

奥方がつい、くすくす笑った。

ギョンターもつい、想像して肩をすくめた。

「・・・そうだな。

俺だってあんたの立場ならぎよっとして固まるな。

だが叔父が言ったらろう？心配無用だと」

叔父が継いだ。

「こいつと俺は家訓の旅の途中だ。

成人前に旅をさせてその後進路を決める」

男は叔父を、見た。

「成人前にしては随分早いな」

「進路を決めるのに何年要るか解らんだろう？」

「進路が決まれば旅は終わりか？」

叔父はそうだと頷いた。

男はギョンターを見つめた。

「幾つに成る？」

「14だ」

男は頷いた。

「まだほんの、餓鬼だ」

ギョンターは少しむっとしてつぶやいた。

「あんたから見れば、そうだろうな」

男は、忌々しそうに“年増”という皮肉を込めてそう言う彼を、見た。

そしてつぶやいた。

「俺がしゃべって相手が怒るのを見、今まで理解出来なかったが・
・つまり馬鹿にされてる気が、するんだな？」

ギョンターが言った。

「俺は・・・」

男は解つてると首を振って遮った。

「そのつもりは、無いんだろう？」

ギョンターはその通りだと、肩をすくめて見せた。

奥方も子供達も、鏡を見るように自分そっくりの息子に興味を示す

彼をつい、伺った。

ギョンターも彼を、見た。

「・・・つまり数年後は俺も、こうなるのか？」

叔父は肩をすくめた。

「・・・まあ、間違い無くな」

男は、嗤った。

「お気に召さないようだか、仕方無いだろう。会っちゃったからな」

「俺なら放っとくぞ」

「・・・出来るか！」

俺の子だろう！間違いない！」

男が怒鳴り、ギョンターは、知らなかった。

男が怒った事が、こんなに・・・嬉しい事だなんて。

ギョンターが言葉を返さず俯き、男はつい、気にするように叔父に訊ねた。

「・・・一人だけ容姿が違うと、兄弟にいじめられるか？」

ギョンターは顔を上げた。叔父は訊ねられて応えた。

「大人しくいじめられてる餓鬼じゃない」

男は、そうだろうな。と頷いた。

「それにこいつの兄弟は、自分達は平気でいじめても、他人にはさせない。他人がそれを言おうものなら喧嘩をしてでも相手を黙らせる」

男はギョンターを、見た。

「兄弟が、好きか？」

ギョンターは途端、乱暴の塊の長男と、優しいがやっぱり乱暴な一つ上の兄を思い出した。

「そんな事言ったら、気持ち悪いと殴られるが・・・仲間だとは思ってる」

「兄弟は何人居る？」

「上が二人で下も二人。」

全部男で最悪だ。食べ物を取り合いでさえ、殴り合いだからな」

男はようやく、笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9022f/>

「アースルーリンドの騎士」外伝 『確かなもの』

2010年10月9日11時38分発行